【入　選】

雪解け水から考える

仙台市立南吉成中学校
一年　堀内（ほりうち）　夕太朗（ゆうたろう）

「水」それは日々ぼくらの生活になくてはならないものだ。しかし蛇口をひねれば出てくる水の大切さを、東日本大震災が起きるまで両親は気付かなかった。三・一一、ぼく達は水のありがたさを改めて知った。ガス、電気、水道全てが止まった。不安で揺れる両親の心を、さらにあおるような冷たい雪がこれでもかと空から降ってきた。スキーウェアを着せられた幼いぼくは無邪気に雪を喜んでいたそうだ。いつもいない祖父母がやってきて家が賑やかだったのを今でも覚えている。その雪解け水を父は家中の衣装ケースにため込んだ。貯めた雪解け水は六人になった一家のトイレに全て使ったそうだ。それでも生活水は足りず、父は二時間ほどかけ、まだ水が出ている場所から毎日仕事帰りに自転車で運んでくれていた。あれから九年が過ぎた。

「コロナも心配だけど、雪解け水が足りないから農業も大打撃かも。」

父が新聞を見ながらつぶやいた。それを聞いたぼくは雪不足の影響について調べることにした。本来ならば、寒い冬が終わると、雪は形を変えて大地を潤す。例年は白く輝く泉ヶ岳が、山頂に白い帽子をかぶっただけで春を迎えてしまった。岩手のスキー場で働く人も

「この時期アスファルトが見えるなんてことは今までなかった。」

といっていた。実際、ぼくたちがその話を聞いたのは三月だったが、岩手の山には雪ではなく雨が降っていた。このまま温暖化が進み、山に雪が降らなかったらどうなるだろう。冬に降るのが雪ではなく雨になってしまったら、山にとどまることなくそのまま川に流れ出てしまい春に代掻きや田植えに必要な雪解け水が足りなくなってしまう。では春にたくさん雨が降ればよいのではないかとも思うが、一度にまたたくさんの雨が降れば、土砂災害が心配だ。去年の台風は、各地でたくさんの被害をもたらした。

水はきらきら輝いて美しいだけではなく、色や形を変えてすべてを飲み込んでしまうケダモノにもなる。災害が次々おそう日本で生活するために、一人一人が防災意識を高めていかなければならない。いつ何が起こるかわからないし、天災は本当に忘れたころにやってくる。ぼくたちにできることは、過去を知りそれを未来に生かすことだ。我が家には、水と食料が一定量必ず備蓄されている。春になれば山に入り山菜を取るのが恒例行事だ。タラの芽やコシアブラは天ぷらやおひたしで食べる。海には魚を釣りに行き、妹は小学一年生の頃から捌き方を教えられていた。祖父の畑で採れた野菜のおかげで、母は野菜をほとんど買わずに過ごしている。海と山、地球に感謝せずにはいられない。ぼくたちは地球と共に生きているのだ。しかし地球の怒りとも思える数々の災害に、戸惑ってしまう。戸惑っているのは人間だけではないようだ。雪が降らず暖かい冬に眠ることができない熊が東北地方のあちらこちらで目撃された。寝る場所を探しているのだろうか、寒い冬をさがしているのだろうか、すぐそばにいる野生動物との境界線が見えなくなっている。水の惑星「地球」を大切にしなければ、人間だけではなく、地球上に住む動植物全てに影響が出てしまう。

ぼくに何ができるのだろう。ＳＤＧｓは達成できるのだろうか。どうせ無理だろうと思ったら何も始まらない。小さな心掛けが海や大地を守り、地球を守ることになる。地球を守ることは、ぼくたちの生活を守ることになるのだ。蛇口をひねれば出てくる水、大地を、生物を潤してくれる水。与えてばかりの地球に、今度はぼくたちがおんがえしをしていかなければいけない。